

# 「ヒューマニズム」の背後

——一九三八年前後の山本有三とその周辺——

平 浩 一

## はじめに

山本有三の活動は、実に多岐にわたるものであり、年々、様々な研究領域において注目を集めている。にもかかわらず、近現代文学の場においては、その考察は停滞・硬直化の感が否めない。特に、彼の作家像が「虚像のうえに実像を重ねている」<sup>①</sup>などと指摘されている現状については、すでに拙論<sup>②</sup>において確認したとおりである（＊以下、同拙論については、「前論」と表記する）。

本稿は、前論において、紙幅の関係等により触れられなかった周辺事項を中心に、山本有三や同時代のさまざまな動向を、補筆の意味合いも込め、包括的に論述するものである。長年にわたる彼の活動のなかでも、特に、前論に引き続き〈両義性〉を帯びた戦時下の作家像を中心に焦点を当てる。ただし、前論でも述べたように、彼の〈両義性〉にアプローチすることで、山本有三自身の活動・意図を、時局への〈抵抗／協力〉という、分かりやすい二項対立の評価軸に再配置することを目的とはしない。山本有三像がどのように形成・発信・流通したのか、そして、その背景

にはどのような時代情勢があったのかに注目していく。その考察を通して、前論とともに、研究が硬直化している山本有三に關し、再検討する地盤形成を行うことを目的としたい。

## 一、「抵抗」と「空洞化」——「ヒューマニズム」の位置と変遷（二）

一九二〇年代末から、新聞連載小説によって大きな人気を博した山本有三であるが、「風」「女の一生」「路傍の石」の〈検閲〉〈削除〉〈打ち切り〉や「ペンを折る」における抗議の姿勢<sup>④</sup>、共産党への資金提供容疑による検挙・拘留、吉野源三郎の身元保証などを根拠に、一貫した「国家権力」への「抵抗の姿勢」<sup>⑤</sup>があったと指摘される。しかし、彼の情報発信のされ方、特に一九三八（昭和一三）年頃の場合を精査すると、相反する側面が見えてくる。対外戦略情報誌『Japan To-day』、あるいは「国語国字」問題や「児童文学」をめぐる動向等に注目したとき、「時代に果敢に立ち向かった」／「為政者の側に立つて、国家統制にかかわつた」という<sup>⑥</sup>、時局に対する〈両義性〉を帯びた作家像が、そこに浮かび上がってくるのである。

さらに、同時代受容にも目を向けると、そうした作家像の形成・流通が可能になった事由も見出されていく。一九三八年七月の板垣直子「現代ヒューマニズム文学——山本有三氏の文学と思想の発展」（『現代小説論』第一書房）をひとつの契機に、「人道主義」と「プロレタリア・ヒューマニズム」<sup>⑦</sup>という、まったく異なる価値観が、「ヒューマニズム」という言葉の中に折り重ねられ、山本有三の評価軸が形成されていた。それがひとつの結節点となり、〈両義的〉な作家像の流通を可能とする回路が構築されていた。<sup>⑧</sup>〈時代〉〈領域〉〈国境〉を横断する山本有三の幅広い活動は、「ヒューマニズム」という評価軸をひとつの基盤としながら、展開されていたのである。

前論をごく簡単に振り返ると右のようになるが、以下、紙幅の関係で割愛した同時代の「ヒューマニズム」の位置

づけについて、特に時局との関係に注目し、補筆を行っていきたい。

元来、「ヒューマニズム」という言葉は、日本語において、殊に近現代文学の場において、非常に規定しにくい側面を持つ。一九六四年の段階で、小田切秀雄は「内容空疎な美辞麗句の一つ」、「衛生無害の観念」という形で、そうした傾向を指摘している。<sup>8</sup>このような性質は、現在においても「ヒューマニズム」は、ほとんど「何でもあり」になつてしまった、「人畜無害の標語」として空洞化<sup>9</sup>した、と言及され続けている。

しかし、このような指摘は、戦前から反復されてきたものであった。たとえば、谷川徹三は一九三六（昭和一一）年の段階で、「市民階級のイデオロギーとして自由主義や個人主義と結びついて確立された」という形で、「ヒューマニズム」の「抵抗」という側面に高い評価を加えたが、同時に、「ヒューマニズム」とは「甚だ曖昧な言葉」で、様々な概念が「いつしよくたになつてゐるところに、いろいろな混乱がある」とも述べている。<sup>10</sup>

この谷川論の背景には、無論、ファシズムが迫る時代情勢のなかで、「ヒューマニズム」という語が広く流通した時代情勢があつた。「学芸自由同盟」等を皮切りに、「人民戦線」「統一戦線」の気運が多少なりとも高まつたとされる一九三五（昭和一〇）年前後の「文芸復興」期、「行動主義」「能動精神」といった言葉とともに、「ヒューマニズム」、あるいは「ネオヒューマニズム」という言葉が広く流通していく。小田切秀雄の言葉を借りれば、「ヒューマニズム」ということば自体が、中日戦争開始前後にはファシズムにたいする防衛と抵抗の試みのなか<sup>11</sup>で、「一種の切実な内面的定着をもつにいたつた」のである。

しかし、一九三七〜三八年にかけての第一次・第二次人民戦線事件等により、組織的な抵抗運動が困難になつていくと、「ヒューマニズム」という言葉も、広く流通していたその分だけ、いわば宙に浮く形になる。谷川は、三六年における前述の論において、「ヒューマニズム」の特性を、「なんでもかでもその中に取込むことができ」、「どんなところへでも入り込んでゆくことができる」とも述べていた。時局が激変していくなか、「ヒューマニズム」が元来は

らむ「空洞化」の陥穽が拡大され、そこに落ち込む形で、様々な概念が「ヒューマニズム」という言葉に吸収されていったのである。

そうした情況について、窪川鶴次郎は次のように指摘している。

かつてヒューマニズムやヒューマニティが論議された当初は、少くともその当初は、その據りどころを失った人間といふ概念を求めようとする自然発生的な要求として、ひとつの意味を持つてゐた。「……」それは空気のやうな気分的なものであつた。だから、それは後に空気のやうに消え去つた。

かくて今日は、ヒューマニティの概念を求めようとするものは、その現実に根ざした直観的な真実性を持つてゐないが故に、あらゆる都合のよい空想の論理を巧みに使用することによつて、自由自在に各場合に応じたヒューマニティを説くことが出来る。「……」そこでは、その相違の多様性に應じてまったく都合のよいヒューマニティの概念を創り上げることが出来る。（『本年度文学の概観——感情の通俗化』『中央公論』一九三九・一二）

この窪川の指摘は、一九三九年のものである。日中戦争の長期化、第一次・第二次人民戦線事件、国家総動員法制定などが立て続けに起こり、激変していく時局のなかで、「空気のやうな気分的なもの」という傾向を帯びつつ広く流通していた「ヒューマニズム」は、窪川の指摘するように、「都合のよい空想の論理」として、より恣意的に用いられるようになっていったのである。

山本有三像の評価軸もまた、「ヒューマニズム」というある種の〈容れ物〉に、異なる価値観が収容される形で構築されていた。その背後には、このような時代情勢があつたことを、ここであらためて確認しておきたい。

## 二、〈新たな〉意味合い——「ヒューマニズム」の位置と変遷（二）

前節では、山本有三の「ヒューマニズム」という評価軸が形成された背景を確認した。本節では、それを前提としながら、一九三八年頃、「ヒューマニズム」に、さらに別の強い意味合いが付与された流れに注目したい。それを端的に示すのが、広く知られる『文學界』の座談会「知識人の立場——附・「文學界」の使命——」（一九三八・五）である。

この座談会の出席者は、河上徹太郎、林房雄、阿部知二、三木清、舟橋聖一、森山啓、武田麟太郎、横光利一であった。表題が示すように、この座談会では、「知識人」や『文學界』というメディア等、広い問題から口火が切られている。しかし、徐々にその話題は、いつの間にか「ヒューマニズム」の論議に集中していく。こうした話題の推移自体が、この時期、「ヒューマニズム」という語が広く流通していたこと、ならびに、時代のキー・タームになっていたことを示す。

ここでは、まず林房雄が「ぼくらの言つたヒューマニズムといふもの」は、「實際上狹義のインテリゲンツィアの間に現はれたヒューマニズムで、左翼主義の退却的延長だつた」と規定している。この林房雄の語る「ヒューマニズム」とは、「文芸復興」期に気運が高まつた「人民戦線的な意味をふくんでいたところのヒューマニズム」（小田切）、すなわち、山本有三像の形成のターニングポイントにもなつた「プロレタリア・ヒューマニズム」を指している<sup>1)</sup>。

ここで注意しておきたいのは、林房雄が「ぼくらの言つた」「さういふものであつた」と、過去形で語っていること、さらに「それが今では通用しなくなつた」と述べていることである。それに呼応する形で、阿部知二も、「ヒューマニズムの解釈をまともにいまやつても、座談会が二三年前に後戻りするだけ」と指摘している。このように、「プ

ロレタリア・ヒューマニズム」という観点は、既に〈古い〉ものだという認識が、この対話の場において共有されている。

ただし、阿部は「さういふものだけをヒューマニズムといふべきか？」という疑問を呈し、他の出席者も、「ヒューマニズムが人類永遠の思想である限り、それは生きてゐる」（河上徹太郎）、「現在のヒューマニズムが何に對してヒューマニズムと言はれてゐるのか」（三木清）という形で、〈古く〉なつた「ヒューマニズム」に「後戻り」するのはなく、そこに〈新たな〉意味合いを見出すべきだ、という形で話題は推移していく。

そこで展開されていく「ヒューマニズム」の〈新たな〉意味合いとは、以下のようなものであつた。

まず、阿部知二は「外国語で言へばヒューマニズムとか何とかいふが、さういふ英語なんか使ふ必要はない。ぼくは温かい心が日本精神だと思つてる」、「まづ日本人として生き、やがてが世界人として生きることには伸びて行くやうなものが本當のヒューマニズムだ」と述べる。舟橋聖一もそれに呼応する形で、「今日のヒューマニズム」とは「日本民族が發展するといふ線に完全に沿ふ處のヒューマニズムでなければならぬ」、「國家發展の線に沿はないやうな行き方のヒューマニズムといふものでは、絶対に駄目だ」、「即ち愛國的人道主義の線に沿つてやつて行くべきぢやないかね」と規定する。さらに、林房雄は「人道主義の偽のパン、偽の肉をくわせておいて日本をいつまでも世界の劣等国家にしてをく、世界に何ものをも貢獻しない國民にする、ロシアの奴隸、イギリスの奴隸にしてしまふといふやうなヒューマニズムがいま日本に唱へられてゐるといふことは日本人を殺すことだ」として、より強い調子で「ヒューマニズム」の問題を包括していく。

すなわち、この座談会においては、「ヒューマニズム」という概念に對して、「プロレタリア・ヒューマニズム」と「人道主義」という「二つの系統」が重ねられてゐるのみならず、「現在のヒューマニズム」「今日のヒューマニズム」として、そこに「愛國的」や「日本精神」という意味合いが〈新たに〉付与されてゐるのである。

谷川徹三が「ヒューマニズム」について、「甚だ曖昧な言葉」で「なんでもかでもその中に取込むことができる」、「どんなところへでも入り込んでゆくことができる」と指摘したのは、この二年前であつた。いわば、「なんでもかでもその中に」入れられる「ヒューマニズム」という〈容れ物〉に、三八年頃から、「愛国的」や「日本精神」といった意味合いもまた「取込」まれていったのである。なお、窪川鶴次郎が「ヒューマニズム」という概念に対して、「都合のよい空想の論理」、「多様性に応じてまつたく都合のよいヒューマニティの概念を創り上げることが出来る」と指摘したのは、この翌年であつた。

戸坂潤は、こうした事態をいち早く察知・予見しており、右の座談会の前年の段階で、すでに「ヒューマニズムとは文化上の日本主義の延長ではな」く、「伝統主義的乃至回顧的なロマン主義はヒューマニズムと凡そ反対なものだ」といふことを、特に注意しておかなくてはならぬ」という警鐘を鳴らしていた。その戸坂の危惧は、現実のものとなつていったのである。

以上、一九三八年頃における「ヒューマニズム」の変遷を、『文學界』の座談会に注目しながら再確認した。ただし、この変遷自体は、何も新たな指摘という訳ではない。たとえば、小田切秀雄も「少なからぬひとびとがヒューマニズムを軍国主義と奇妙な仕方では調和させる（！）方向にも進んだ」と指摘している。

ここで注目したいのは、こうした同時代の「ヒューマニズム」のあり方が、三八年以降の山本有三の評価や活動にも反映していったことである。「ヒューマニズム」は、この後「反ヒューマニズムの思想のなかにさへ——たとえばファシズムや封建主義（封建支配を権威づける思想）のなかにさへ部分的にはふくまれる」（小田切）という、矛盾をはらんだ、より恣意的で多義的な性質を含有していく。そうした傾向が、この時期に記録された山本有三像にも見られるようになっていくのである。

### 三、〈両義性〉の再確認

戦時下の山本有三の動向については、これまで幾度も「戦争というひとつのいまわしい現象にたいする文化的抵抗」、「時代に果敢に立ち向かった」、「真の自由主義者」といった指摘が繰り返されてきた。その根拠とされたのは、先に触れた「風」「女の一生」「路傍の石」における〈検閲〉〈削除〉〈打ち切り〉の問題に加え、『日本少国民文庫』刊行や、「ふりがな廃止論」の主張、あるいは「ペンを折る」の存在であった。

しかし、前論ですでに明らかにしたように、対外戦略情報誌や内務省との関係等において、また違った彼の作家像のあり方が浮かび上がる。それは、「為政者の側に立つて、国家統制にかかわつた」という側面であった。

こうした山本有三の行動を受容する評価軸は、前節で確認した「愛国的」や「日本精神」という意味合いをも取り込んだ「ヒューマニズム」のなかに、位置づけることができる。特に、一九三八年以降の山本有三像において、それは顕著に見られていくのである。

今村忠純が注目しているように、大政翼賛運動の「国民の自発的協力」を促すため結集された「中央協力会議委員」の代表に、山本有三は名を連ねている。その第一回の会合は、一九四一年六月一六日から二〇日までの五日間に行われたが、最終日の六月二〇日、「中央協力者会議全員懇談会」が開かれ、山本有三は会議全体を締めくくる挨拶を行っている。そこでの山本有三の発言は、「大政翼賛会」による『第一回中央協力者会議会議録』（一九四一）に記録されている。今村がすでに紹介しているものの、比較的貴重な資料であるため、少々長くなるが、同会議録よりそれを引いておきたい。



或る家に子供が生れた。それはその家に子供が生れたといふだけではありません。それは国家に子供が生れたのだと思ひます。一人の子供が生れたといふことは、その両親の子供であるばかりでなく、それは国家の子供であり、また陛下の赤子なのだと思います（拍手）。かういふ風に考へますと、生れた赤ん坊の為に国家がお祝ひをしてやるといふことは必ずしも不思議のことではないと思ふのであります。さういふ風にしてやることによつて、その赤ん坊は自分は陛下の赤子なのである、国家の国民なのであるといふ觀念を赤ん坊の時から深く刻み込まれることになるのではないでせうか。文部省では国民教育を徹底させる為に今年から小学校を廃めて新たに国民学校を興しました。それは非常に結構なことだと思いますが、子供を教育するには必ずしも七つの時まで待つて居なくてもよいと思ひます。赤ん坊は赤ん坊が生れ落つると共にさういふ觀念を吹込んで、それは決して早過ぎることはないと思ふのであります。世間にも動もすると子供は自分のものであるといふ考へを持つて居る親達が少くないやうであります。極端なものになりますと、俺の子を俺がどうしやうと勝手ぢやないか、芸者に売らうと女郎に叩き売らうと親の勝手だ、かういふことをいつて怒鳴る親父があります。かうした誤つた考へを叩き直す上からいつても、それは十分に効果のあることと思ひます。一体俺の子だとか他人の子だとかいふ考へが利己主義を蔓らせるところの原因だと私は思ふのであります。他人の子であるとか、自分の子であるとかいふ前に先づ国家の子だといふ觀念を赤ん坊の内に吹込む必要があります。いやそれは赤ん坊ばかりではありません。その両親、いや国民全体に私は吹込む必要がある。殊に今日のやうな場合に於てはそれが必要なのだと思ふのであります。

今、木綿がない綿ネルがない、さういふ時に国家からネルの産衣なり或は木綿の肌襦袢なり、さういつたものを戴いたとしましたら、家庭はどんなに感謝するでありますか、その産衣と一緒にこの度お子さんがお生れになつたさうで洵にお目出たうございます。国家に一人の寶が生れたわけです。国家として深くお喜びを申上げま

す。どうか大事に育てて下さい。国家はあなたの赤ちゃんが健やかにお育ちになつてゆく／＼は立派な人物となり、国家の為に働いて戴きたいと祈つて居ります。あなたの赤ちゃんの御出生を祝つて心ばかりの品でございませうが産衣を一枚お届け致しますどうか赤ちゃんに着せてやつて下さい。たとへばかういつたやうな手紙がお上から産衣と一緒に届きましたならば、その家庭はどんなに感激致すでありますか、私はお乳の出ないお母さんでも急にお乳が出て来るやうになりはしないかと思ふのであります。

この山本有三の主張は、直前の「もう二三分位時間が戴けるでございませうか」という発言からも、彼にとつて、重要な意味合いを持つていたことが推察される。繰り返すが、こうした記録をもつて、直線的に、山本有三の〈抵抗／協力〉をはかうとしても、あまり意味は無いだろう。むしろ、そうした分かりやすい〈レッテル貼り〉に對しては、慎重であらねばならない。<sup>(16)</sup>

ただし、時局への「抵抗」ばかりが前景化され、「戦争というひとつのいまわしい現象にたいする文化的抵抗」、「時代に果敢に立ち向かつた知識人」等の指摘が幾度もなされ、戦後から現在にかけて、近現代日本文学研究の場で、ある種〈神格化〉されてきた山本有三像を、一旦、こうした記録をもつて、相対化することには一定の意味があるだろう。

再確認するならば、前節から見てきたように、「人道主義」と「プロレタリア・ヒューマニズム」という「二つの傾向」のみならず、「愛国的」や「日本精神」という概念が加えられた「ヒューマニズム」という評価軸を基盤としながら、戦時下の山本有三の活動、ならびにその作家像の形成・流通は展開されていったのである。

山本有三の作品受容においても、こうした〈両義性〉は垣間見られる。たとえば、阪田寛夫は、『日本少国民文庫』に収録された「心に太陽を持て」<sup>(17)</sup>の読書体験について、以下のように述懐している。

いわゆる「支那事変」が始まった昭和十二年夏には私は小学六年生で、既に教育勅語を暗記させられていたのを手始めに、のちには一億一心とか神州不滅とか、どういうわけか漢字四文字を組み合わせた滅私奉公、忠君愛国といった道徳律をやたら賑やかに頭に詰めこんで育ったけれども、同時に別のポケットには、「心に太陽を」という言葉もしまつてあった。（一枚の写真——心に太陽を）『新潮日本文学アルバム 山本有三』一九八六・七）

しかし、阪田は同時に、次のようにも述べている。

戦争末期に進学した旧制高校の寮生大会で、米英撃滅を説いて新入生を叱咤した羽織袴の狂信的な上級生の演説に、意外にも、

「心に太陽を！ 唇に歌を！」

という一節があつて、この時は仰天した。私の勝手な気持では、「心に太陽を」は、戦争を讚美し、敵意をかき立てる意志とは、全然別のひきだしに属する事柄だったからだ。（同前）

こうした、阪田が驚嘆をもって述べた、山本有三の戦時下における〈両義的〉な作品受容も、その背景にあつた作家像の流通とその動向を見据えると、ある種、納得のいく事柄であることが再確認できよう。

#### 四、山本有三の活動と研究の展望

本稿冒頭でも確認したように、山本有三の営為は、実に多岐にわたるものであった。本稿を締めくくるに際して、再度、山本有三の活動を簡単に振り返りながら、これまで述べてきたことを、そこに位置づけ直しておきたい。

大正期に戯曲作家・演出家として名を成した山本有三は、時代を昭和に移してからは、主に新聞メディアを舞台に、連載小説によって「国民的」「第二の漱石」と称されるほどの人気を博していった。また、児童文学の分野においても、『日本少国民文庫』『銀河』刊行やミタカ少国民文庫開設をはじめ、様々な活動を繰り広げた。

こうした文学活動だけでなく、「国語国字」問題、大学教育、教科書編纂、憲法口語化、著作権保護活動、政治家としての活動など、彼は様々な場面において〈国内／外〉をまたにかけ、種々の活動を展開していく。それらの活動の多くが〈戦前／戦中／戦後〉を横断するものであったことも特筆すべきであろう。

特に、戦中から戦後にかけての活動は精力的なものであり、「国語国字」問題については、三鷹国語研究所を私邸内に設け、それが母胎となつて「国民の国語運動連盟」結成、山本有三は国語審議委員会委員となり、「当用漢字表」の案を提出・可決、四八年には国立国語研究所を創設する。また、児童教育により注力し、四二年に邸内にミタカ少国民文庫を開設<sup>⑧</sup>、戦後にはいち早く少年少女雑誌『銀河』を創刊、小中学校の「国語教科書」編集にも積極的にかかわり、「ヒューマニズムあふれる教科書」として「山本国語」「山国」の愛称をもつて教育界に迎えられ<sup>⑨</sup>た。こうした多岐にわたる活動を基盤に、四六年貴族院議員、四七年には参議院議員となり、文化委員長・文部委員長等も歴任していく。そこでも、祝日や満年齢の法案を立案制定するなど、今日のわれわれの暮らしに、彼の活動は深くかかわっている。

こうした〈時代〉〈領域〉〈国境〉を越境し横断した山本有三の動向は、繰り返すと、「ヒューマニズム」という評価軸を基盤に展開された。しかし、その多義的で曖昧な作家像・人物像があまりにも強化されたがゆえに、現代社会に多大な影響を及ぼしているにもかかわらず、山本有三の研究は、現在、停滞・硬直化の感が否めない<sup>20)</sup>。

「虚像のうえに実像を重ねている」とも指摘される山本有三(像)に対し、本稿で見てきたような〈両義性〉により強く焦点を当て、上笙一郎らが指摘するように、「二つの顔」といった批判的な見方をすることも可能であろう<sup>21)</sup>。実際に、そうした観点に注目した安田武や今村忠純の考察も非常に示唆的である。ただし、それらの考察をより有意義な形で引き継ぐためにも、今日の視点から〈抵抗／協力〉という分かりやすい二項対立の軸に、山本有三の多岐にわたる活動を、安易に再配置することには慎重であらねばならない。今現在必要なのは、彼に付与された「ヒューマニズム」という評価軸を一つ一つ丁寧に紐解き、その覆いを取り除くことで、まずは、山本有三の活動を直視することそのものではないだろうか。その地点から、山本有三研究の新たな地平がひらかれていくことを、前論とともに本稿における補筆によって、あらためて述べておきたい。

### (注)

(1) 池内紀「座談会『風土と文化』」(『波』『風』展——自然と人間ドラマ——一九九・五、(財)三鷹市芸術文化振興財団・三鷹市山本有三記念館)。

(2) 拙論「横断する作家像——山本有三像の流通とその行方」(『昭和文学研究』二〇一七・三)。

(3) いずれも『東京朝日新聞』『大阪朝日新聞』に掲載。連載期間は、それぞれ一九二八・七・二〇～二一・二二、一九三二・一〇・二〇～三三・六・六、一九三七・一・一～六・一八。それぞれの〈検閲〉〈削除〉〈打ち切り〉の経緯については、前論(注2)を参照されたい。

(4) 「路傍の石」は『東西朝日新聞』にて、「第一部」で打ち切られた後、『主婦之友』に「新篇 路傍の石」として再連載が行われたが（一九三九・一〇四〇・七）、内務省の事前検閲で削除を余儀なくされ、やはり、実質上打ち切りという形で終わった。その際、山本有三は、同誌に「ペンを折る」（一九四〇・八）という怒りに満ちた文章を残している。

(5) 平林文雄『山本有三研究——中短編小説を中心に』（二〇二二・八、和泉書院）。

(6) それぞれ、関口安義『路傍の石』と『戦争とふたりの婦人』——大戦前夜の有三児童文学』（『大正・昭和の童心』と山本有三『二〇〇五・一〇、笠間書院』、根本正義『山本有三と児童文学——その一九三〇年代の位相』（『解釈と鑑賞』二〇〇八・六）。

(7) 前論でも記したように、「プロレタリア・ヒューマニズム」という用語は、特に多義的な意味を含有するため、注意が必要であろう。ここでは、板垣前掲書収録「最近の文芸思潮変遷の要点」でも示されているように、「マルクス主義思想の退潮」に基いて生じた、「元来、人民戦線といふ政治活動に対応すべき文化活動」（戸坂潤「現代日本のヒューマニズムと唯物論」『唯物論研究』一九三七・二、「人民戦線に於ける政治と文化」『セルパン』一九三六・九）という意味合いを指す。

(8) 「日本のヒューマニズム」（『現代日本思想大系17 ヒューマニズム』一九六四・三、筑摩書房）。以下、小田切の引用は同論に拠る。

(9) 栗田廣美『愛と革命・有島武郎の可能性（『叛逆者』とヒューマニズム』（二〇二二・三、右文書院）、同「ヒューマニズム理念の危機と可能性——有島武郎精神史の中核的問題に関連しつつ」（『白梅学園短期大学紀要』二〇〇四・三）。

(10) 谷川徹三「ヒューマニズムについて」（『思想』一九三六・一〇）。

(11) 注(7) 参照。

(12) なお、対外戦略情報誌における山本有三像の発信の例として、前論で注目した『Japan To-day』における「Leading Figures of Contemporary Japanese Literature3: Yuzo Yamamoto」の記事を書いたのは阿部知二であった。

(13) 戸坂潤「現代日本のヒューマニズムと唯物論」(前出)。

(14) それぞれ、今村忠純「山本有三の生涯」(『人と作品34 山本有三』一九六六・一二、清水書院)、関口安義「路傍の石」と『戦争とふたりの婦人』(前出)、永野賢「評伝」(『新潮日本文学アルバム 山本有三』一九八六・七、新潮社)。

(15) 今村忠純「米百俵」前提(『戯曲の領域展』二〇〇二・五、(財)三鷹市芸術文化振興財団・三鷹市山本有三記念館)。

(16) 権錫永「アジア太平洋戦争期における意味をめぐる闘争(1)——序章」(『北海道大学文学研究科紀要』二〇〇〇・一二)等参照。

(17) 『日本少国民文庫』の第一回配本である第二二巻(一九三五・一一、新潮社)に収録された。原作自体はツェーザル・フライシュレン(Cäsar Flaischlen)であるものの、山本有三が、この詩の収録に強くこだわり、「おれの訳にする。誤訳だと非難されれば、おれが責任を負う」という言葉とともに、大幅に改訳、末尾の一行を完全に改変したことは、高橋健二が述懐しているとおりである(『ドイツの名詩名句鑑賞』一九九一・一〇、郁文堂)。そのため、今村忠純は、「有三の向日性の理念は、「心に太陽を持って」に収斂されるといってもよい」と指摘している(「山本有三の生涯」前出)。

(18) 後の「有三青少年文庫」(一九五七・一二・二二開館)、「三鷹市有三青少年文庫」(一九八六・一〇・一七開館)、

現「三鷹市山本有三記念館」(一九九六・一一・三開館)。『解説 三鷹市山本有三記念館』(二〇〇九・一〇、(公財)三鷹市芸術文化振興財団・三鷹市山本有三記念館) 参照。

- (19) 永野賢「評伝」(前出)。日本書籍株式会社から、五一年三月に小学校用全一四巻、五三年三月に中学校用全六巻の「国語教科書」が刊行された。

- (20) 山本有三に付与された、曖昧で多義的な「ヒューマニズム」という評価軸は、時代を下るにつれ、さらに様々な形容や呼称に換言・拡張されていった。それについては、「社会派、ヒューマニスト、リベラリスト、理想主義などの言葉で有三が語られて……」という形で、既存の様々な評論や文学史書における、山本有三の解説の狼雑さや恣意性が、すでに指摘されているとおりである(Y・S「文学史の位置付け」『未完の「路傍の石」展』一九九七・一〇、(財)三鷹市芸術文化振興財団・三鷹市山本有三記念館)。こうした流れも、山本有三の位置づけを、より複雑にしてきたと見ることができだろう。

- (21) 「座談会」子どものための叢書と山本有三(『大正・昭和の「童心」と山本有三』前出)。

- (22) 安田武「誠実主義と文学——山本有三」(『共同研究 転向 中巻』一九六〇・二、平凡社)、今村忠純「リベラリズムの運命——岸田国土・山本有三など」(『國文學』一九七五・七)。

※本文の傍線・傍点は、注記の無い限り引用者による。また、原則として旧字は新字になおし、ルビは省略した。なお、本研究はJSPS 科研費 15K02243 の助成を受けたものがある。